

島にたった一つの映画館

前川 良太

「映画の上映会をしない？」と、ぞう組の阿部さんに声をかけてもらって、いろいろ相談しているところなのですが、その映画が「ここなら上映してる！」と教えてもらったのが、淡路島の洲本市にある「洲本オリオン」という小さな映画館でした。調べてみると、なんだかとっても魅力的な映画館だったので、はるばる洲本まで、その映画を観るために飛び出していきました。

どうやらその映画館は「島で唯一の映画館」だそうで、1スクリーン 99席の本当に小さな映画館でした。戦前に人形浄瑠璃の芝居小屋として開館し、その後は洋画や邦画を上映するシネマへと姿を変えていったのです。しかし、大手シネコンの波に押されて一時は廃館に。そこから、住民の「なくなつてほしくない」という声を受けて、定期上映を行う映画館として復活したそうです。

その映画館の面白いところは、話題作や館長さんが選ぶマイナーな映画だけではなく、地域の人が「これを上映してほしい」と持ち込んだ企画と一緒に形にしているところです。私が観たかったのは、公立小学校の1年間を記録したドキュメンタリー映画だったのですが、その上映も、地域の“普通のお父さん”が企画を持ち込んだことから始まったそうです。その方にきっかけを聞いてみると、「『教育とは何か』『人を育てるとはどういうことか』を、私を含め大人たちがあらためて問い合わせ直す必要があると思ったんです」と話してくださいました。

そんなこんなでワクワクしながら弾丸で淡路へ。小さな商店街の路地にあるその映画館ですが、またその路地もステキで、「洲本レトロ小道」と呼ばれているそう。何を飲めるのかよくわからないけど雰囲気だけは抜群のカフェや、古道具屋さん、味のある作家物を扱う陶器屋さんが並んでいて、歩いているだけで楽しくなる通りでした。そんな中にポツンと建つオレンジの建物が目的の場所でした。



映画館の扉を開けた瞬間、少し埃っぽい匂いがして、「昭和の映画館ってこういう感じなんやろな」と平成生まれの私にとってはむしろ新鮮でした。ロビーも天井が低くて、座席も古めかしい感じ。でもその“古さ”がなんとも落ち着くのです。長いあいだ島の人たちを受け止めてきた場所なんやろうな、と自然と思えてきました。

ここはただ映画を見るだけの場所じゃなくて、島の人たちが集まって、誰かが「これ観たいんやけど」と持ち込んだ映画と一緒に観たり、観終わったあとに少し話したりするような、ちょっとした文化のよりどころになっているのが伝わってきました。映画館というより、映画を通して人々が交わるような場所なんでしょうね。

そんな場所に触れていると、ふと園のことを思い出しました。映画館と保育園なんて全然違うのに、「地域の中にある拠点」という意味では意外と似ているところがあるな、と。

子どもの育ちを中心にながら、保護者や地域の人たちの思いや関心が入り出で、そこで小さな出来事や対話が生まれていく。園もまた、地域の人たちがいろんなことを“持ち込み”ながら一緒に場を育していく場所なんだと、あらためて思いました。

最新であることよりも、人の思いを受け止め続けること。洲本オリオンがそうして島とつながってきたように、私たちの園もまた、子どもたちを真ん中にしながら地域とともに歩む園でありたい。そんなことを、あの小さな映画館が教えてくれた気がします。